

～温故知新を感じさせてくれる「本」～

看護学部 助手 萩原智代 (2014.3.5)

「本」と聞くと、いつも自分自身を豊かにしてくれる、ありがたい存在としかいいようがありません。自分を振り返ってみますと、本はいつも自分のそばにあり、手放せなかったのを思い出します。小学生の頃は、動物図鑑や歴史マンガにのめり込んで、授業中こっそり読み耽り、担任の先生に叱られたりもしました(恥ずかしい思い出ですが)。中高生になると、歴史小説や伝記が好きになり、今で言うと歴女、と呼ばれるくらいだったかもしれません。友人達と本を貸し借りし、感想を述べ合うのがとても楽しかったのを思い出します。そして今、小学生の娘に与える本を探すのがとても楽しくて仕方ありません。実家から、自分が読んでいた本を山のように送ってもらい、その中から娘に選んで渡し、一緒に読むのを楽しんでいます。中には、私の母が若い頃読んでいた本もあります。外観はもう色が褪せていますが、読み返してみると内容はちっとも色褪せてはいません。今は電子書籍も浸透してきていますが、製本された本にはページを手でめくり、また戻って好きなページの読み返しができ、さらに人と人との間で共有できる、という替えがたい魅力があると思っています。

仕事の面では、本が身の助けとなったことがありました。秋田で保健師として働き始めた頃の話です。高齢者の方を相手に秋田出身ではない私は、「秋田」という土地について知らない自分をまざまざと感じていました。自分自身の好奇心も手伝い、地元の図書館に行って郷土史を読み、自分がいつも担当している地区のことを知り、その後訪問した際に高齢者の方へ郷土史を話題にし、昔のことを尋ねると、嬉しそうに教えてくれたことが忘れられません。そしてその知識は、地域の中で地域住民とやりとりするにあたって潤滑油になってくれたのです。「秋田」という土地を知ることができた喜びを私に与えてくれ、地域へ入っていくきっかけも作ってくれた本に感謝しきりです。

私の好きな言葉は「温故知新」なのですが、本を読む楽しさはまさに「故きを温めて」の部分だといつも感じています。

皆様も、秋田の郷土史、是非読んでみてください。

—参考図書—

- ①「図説秋田県の歴史」(図説日本の歴史 / 色川大吉 [ほか] 監修, 5)
田口勝一郎責任編集 ; 塩谷順耳 [ほか] 執筆
河出書房新社, 1987.7
- ②「目で見える秋田・男鹿・南秋の100年」(目で見える秋田県の100年シリーズ)
齋藤壽胤監修 ; 伊藤武美 [ほか] 編
郷土出版社, 2002.2
- ③「秋田市史」秋田市編 秋田市, 1996.3-2006.3

*当館にも所蔵しております。

- ① 212.4:Ta19 ② 212.4:Me14 ③閉架 212.4:A37(第14巻 1998.3)